

歴史の中の女たち <第 24 回>

ロラ・モラー孤高の彫刻家

伊藤 滋子



ブエノスアイレスのコスタネラ・スルにある『ネレイダスの噴水』は疑いもなく市内で最も魅力的な彫刻のひとつで、『ロラ・モラーの噴水』として知られており、彫刻が作家の名で呼ばれる珍しいケースである。そこはいまでこそ、港の再開発によって多くの市民が憩う賑やかな場所となり、作品も周囲に透明な柵がめぐらされて保護されているが、つい最近までは訪れる人とてなく、ラプラタ河のはるか上流から流されてきた蛇やサソリなどが棲む自然公園の唯中で、人影のない寂しい荒地に打ち捨てられた彫刻の姿はいかにも痛々しかった。なぜこの美しい噴水がそのような場所にあったのだろうか？

ロラ・モラーは本名をドローレス・モラー・ベガといい、1866 年アルゼンチン北部のサルタで生まれ、トゥクマンで育った。父親は裕福な商人で、男 3 人女 4 人の兄弟とともに 10 室もの部屋やピアノがある大きな家に住んでいたが、彼女が 17 歳の

時、突然両親が相次いで亡くなる。兄弟たちは長姉の夫の庇護をうけるようになるが、一家の結束は固く、晩年のロラを世話したのも姪たちだった。

ロラは 20 歳の時、トゥクマンにやってきたイタリア人の教師について絵の勉強をはじめた。そこで学んだネオ・クラシック主義やイタリアのロマンティズムは彼女の芸術の根底となり、生涯その基本から外れることはなかった。28 歳ではじめて、彼女が描いた歴代のトゥクマン州知事の肖像画 21 枚が州政府に買い上げられ、職業芸術家としての一步を踏み出す。自信を得た彼女はブエノスアイレスへ行き、芸術振興会にヨーロッパへ留学する奨学金を申し込んで認められた。期間は 2 年間だった。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてアルゼンチンはようやく国内的にも落ち着き、歴史上最も繁栄する時期に入ろうとしていた。そして後に『南米のパリ』と呼ばれるようになるブエノスアイレスの変容はこの頃始まり、ちょうど日本の明治時代のように、外国人建築家や芸術家を招聘し、同時にヨーロッパに美術留学生を派遣して積極的にその文化を吸収しようとした。最初の留学生グループはローマとフィレンツェでルネッサンス美術を学び、ロラが属する 2 番目のグループはフランスで近代美術を学ぶことになっていた。しかし 1897 年、弟を連れて渡欧したロラは師の影響からか、ローマに行く。そこで師事した画家が元は彫刻家だったことから、次第に彫刻に惹かれるようになり、途中で進路を彫刻に変え、モンテベルデの工房に入った。彼はアカデミックな基礎を修め、

現代のミケランジェロと呼ばれていたほど、イタリアでも著名な彫刻家だった。

それまで彫刻はほとんど男性の世界であった。重くて固い材料を扱うには力が要ったし、石膏と埃にまみれての長時間の作業は女性には無理とされていた。また女性が裸の男性モデルを観察することなども、当時の常識に反していた。パリの芸術学院で女性の入学が許されるのはようやく1897年になってからのことである。それまで女性はコンクールに応募することも、教鞭をとることも許されず、解剖学を学ぶ機会も、男性モデルを前にして作品を作る機会もなく、彫刻家の工房に入って個人レッスンを受けるしかなかった。しかしモンテベルデの工房にはチリ人の女性彫刻家もいたし、ロダンの弟子のカミュー・クロードルの名も知られているように、この世界への女性の進出は徐々に始まっていた。

ロラの才能を認めた師は彫刻家になることを勧め、彼女はそれに従ってローマに腰を据えて工房を開く。その後アルゼンチンには何度か帰国したが、1914年、第1次世界大戦がはじまり工房を閉じるまで、制作の場は常にローマに置いた。最高級とされるイタリア北部のカララ産の大理石を使うことが多く、ブエノスアイレスからでは、壊れたり、大理石にしみがあったりした場合、新しい材料の入手に時間がかかるからだ。工房は一応女性らしい内装を施してはいるが、完全な職場であり、そこで構想を練り、さまざまな人の訪問を受け、意見を交換し、交渉し、作品を作り上げた。ローマの市内で4回場所を変えたが、最後の工房はイタリアのマルガリータ元女王の宮殿に近い、貴族階級が住む高級住宅街にあった。

工房は住まいを兼ねていたので、ロラにとって私生活と公的生活の区別ははっきりせず、自ら進んでマスコミに協力し私生活を公表したくらいで、工房で撮った多くの写真が残されている。作業の時はサルタ地方のガウチョが使うボンバチャ（ゆったりしたズボン）、グレイの長い上着、トゥク

マンのベレー帽といういでたちであった。着心地が良く、土をこねたり、ノミを振るったりするのに便利だったからだ。女性がズボンをはくということは男性の分野に女性が進出しようとする社会的風潮の象徴と受け止められた。

写真から見る限りロラは女性らしい優美さと繊細さを併せ持ち、弱々しく、手をさしのべたくなるような印象を与える。それはロラが意図的にその様な写真を撮らせて、記者たちがその様なイメージを抱くように誘導したからであった。実際の彼女は闘争心に満ち、エネルギーあふれる男性的な性格で、大胆で挑戦的な精神の持ち主だ。そうでなければ男性にしか許されていない分野に切りこんで、彼らと肩を並べて張り合うことなどできなかっただろう。自分を売りこむためには臆せず有名人に近づいてその保護を求め、あるいは報道陣を味方につけて協力を仰ぎ、時にはウイנקとともに正確でない情報を流し、都合のよい方向に報道を導くことも辞さない。

しかし一概に彼女を責めることはできない。実力だけでは、公共の場における彫刻の制作を任される機会は永遠にこなかったかもしれない。たとえばサンクト・ペテルスブルグにロシア皇帝の像を造る選考会にロラはトゥパック・アマルという偽名で応募し、第1位を獲得している。（その仕事を請け負うためにはロシア国籍を取らねばならず、実現しなかった。また、これと同じ理由で、ロンドンで行われた、メルボルンに建てるビクトリア女王像の仕事も、1位に入りながら放棄している。）ローマの芸術院コンクールに応募した時にはL.M.ダ・ビンチという名を使った。彼女の評判を聞きつけたアルゼンチンの名士が写真を送ったりローマの工房を訪れたりして、自分や家族の彫像を注文する機会も増えたが、そのような仕事を通じて築いた人脈も彼女の本国での活動に大いに役立ったことはいうまでもない。

1900年、ロラは初めてブエノスアイレスに帰り、市と『ネレイダスの噴水』建設の契約を結ぶ。テ

ーマは大きな貝殻からビーナスが誕生する、ギリシア神話に由来する場面であった。その貝を支えるのは人魚の姿をした二人の水の妖精（ネレイダス）で、水の中には荒馬を鎮める三人のトリトン（ポセイドンの息子で下肢は魚）がいる。人魚は腰から下が鱗でおおわれているのが普通だが、ローラの妖精たちは豊かな女性の肢体を持ち、かろうじて膝から下だけが鱗と尾びれであった。ブエノスアイレスの新聞には粘土でできた模型の写真が掲載され、「五月広場に置かれる予定のこの噴水の作家ローラ・モラは若い彫刻家の登竜門として毎年ローマで開催されるコンクールにおいて、40人の応募者のなかから最優秀賞を取った」と報じた。その後も新聞は彼女を賞讃する記事を書き立て、ローラを偶像化したイメージが作り上げられていき、彼女は一躍時の人となった。

ローマに戻ったローラは本格的な作品の制作に入る。土でできた模型をまず石膏に移し、それから大理石を彫るのが手順だった。一方ブエノスアイレスでは、ローラに対する好意的な報道が続き、市民の期待はいや増した。だが市議会では、「噴水は贅沢すぎる」「市長は正規の手続きを踏まずに契約した」といった反対意見が出て紛糾した。500ペソ以上のものは入札によらなければならない、という規定に違反していたからだ。ローラはこれを知ると、一時は噴水を外国に売ることも考えた。米国のサンフランシスコやミネソタ、フィラデルフィアなどの都市から、高い値で買い取りたいという申し込みを受けていたからだ。これを翻させたのは駐イタリア大使モレノとロカ大統領という、ローラが最も信頼を寄せていた二人の保護者であった。大使は愛国心からローラに、作品を外国には売らず、予定通りブエノスアイレスに送るように説得し、大統領は早急に噴水を建設するように命令を出した。この鶴の一声で多少時期は遅れたが、ローラは1902年8月、18個に分けて梱包した作品とともにブエノスアイレスに帰る。

しかし、肝心の作品を設置する場所はまだ決まっていなかった。当初考えられていた政庁の前にある五月広場は国家的な行事が行われたり外国の賓客を迎えたりする公的な場所であり、カテドラルにも面している。そこに神話とはいえ裸体像を置くのはふさわしくないと考えられた。当時ブエノスアイレスではまだ公共の場に裸体像はなかったので、それも人々の好奇心を煽った。さまざまな候補地の中から、ようやくパセオ・デ・フリオと決まり、除幕式がおこなわれたのは1903年5月のことだった。政庁の裏手にあるその公園は港にも近いと、当時アルゼンチンにどっと押し寄せてきた移民や下層の人々がたむろする、あまり上品とはいえない場所で、ビーナスは政庁の方を向いて据え付けられた。



なにしろ初めて公共の場に置かれる噴水、大理石で最初の噴水、女性の手で造られた噴水、裸体の、論議的となった噴水であり、何もかもが初めてづくしである。報道によって前評判はいやが上にも高まっていたから、除幕式の日には朝早くから少しでも良い場所を陣取ろうと大勢の人が詰めかけた。式が始まると拍手や口笛が鳴りひびき、人々は熱狂的に彼女をたたえ、ローラは人々が見えるように担ぎあげられ、まるでお祭りのような騒ぎである。集まった人々は自分たちもその噴水を共有しているように感じ、作品はあたかも彼らに献じられたごとくであった。誰もがこぞって作品

を褒めたたえ、もっと良い場所に置かれなかったことを残念がり、新聞は式が簡素すぎたと批判した。そして民衆の支持は、『噴水』によって政治家たちの間に生じた亀裂を覆うに十分であった。これまで芸術作品がこのような受け取られ方をしたことはなく、作者の名前がこれほど取り沙汰されたこともなかった。

除幕式のあと、市の委員会はロラに対する支払いを検討した。新聞に発表された収支計算によれば、ロラに支払われた金額と制作にかかった費用はほとんど同額である。間もなくこれを風刺する漫画が新聞に載った。噴水の前でロラが男と話している。「大変美しい彫刻だが、なぜみんな裸なのですか?」「服を着せるお金がなかったの」とロラに言わせ、経済的に困難な中で作品を制作しなければならない状況に彼女を追いやったことを批判した。以前は彼女の足を引っ張ろうとした委員さえ、「この噴水に予算を支出すべきでないと言ったことを謝りたい。この半分のでき栄えも期待していなかったからだ。その美しさと作者の才能に敬意を表したい」と述べた。政治家たちもモラル面から責任を感じていたが、民衆の側からも、この芸術作品をもっと良い値段で外国に売れたのにそうしなかった彼女に何らかのお礼をすべきだという声上がり、新聞も「誰もがその美を楽しみ、感嘆している。だが彼女の懐は空っぽだ」と書き立てた。その結果、市から1万ペソの謝礼が彼女に贈られることになる。ロラは市長あてに感謝の手紙を書くが、支払いの遅れにより彼女と助手たちが多大の被害をこうむったことも記し、プロの芸術家としての自分の立場を明らかにしている。

一躍時代の寵児となったロラにはさまざまな仕事が無数に舞い込む。この頃ブエノスアイレスの美化は大いに進み、町は大きく変容していた。政庁はすでに出来上がっており、コロン劇場と議会が建設中だった。1904年にトゥクマンの歴史記念館に2つのレリーフを完成させ、幾つかの著名人の彫

刻を制作したロラは次の照準を議会に合わせる。そして首尾よく議会の中に置く政治家の像や正面玄関の階段脇に置く大きな彫刻を請け負うことができ、それを完成させた。しかしこの頃から彼女の行く手に影がさし始める。あらゆるツテを頼って、直接大臣や大統領と話し、仕事を持ちかける、というのがロラのやり方であった。彼女は芸術家たちの仲間には加わろうとはせず、孤高を保ち、国立美術館、芸術委員会、芸術振興会などの組織とも無縁であった。そしてこれらの組織の上に君臨して、美術界にさまざまな制度を築こうとしていたのが国立美術館長のスキアフィノである。

画家でもあった彼の美術界における貢献は、芸術家の地位を向上させたという点で評価されなければならないが、彼は女性画家のコンクールへの参加を認めないという、激しい偏見の持主であった。そして彼が例外であったのではなく、それが当時の常識であった。ましてや女性の彫刻家などは論外で、彼は当初、決してロラを一人前の芸術家として認めようとはしない。1899年、ロラが留学の延長を申請した時、当然彼は反対したが、ロラは政治家の影響力を使ってそれを獲得してしまった。国費留学生の選考制度が正式に発足する数日前のことであったから、かれは臍をかねたことだろう。公共の場に置かれる芸術作品の発注についても選考委員会を通じて行われることが制度化されつつあった。だからこの大御所とのスムーズとはいえない関係はロラにとって非常に高くついた。現在に至るまで、国立美術館に彼女の作品は一つも収蔵されていない。

1907年、パレルモ公園の中にロラが完成させたデル・バジェ像が除幕式の前に腕を切り落とされるという事件が起る。犯人が分からないまま、作品は撤去された。同じ年、議会正面の屋上を飾る四輪馬車の装飾にイタリア人彫刻家ポルが選ばれ、ロラは外された。それは彼女がバックアップしてくれる政治家の支援を失ったことの証しであり、同時にブエノスアイレスの美術界からの追放を意

味した。群れをなすことを嫌った彼女は、展覧会に出品することはおろか、見に行くことさえ稀だったくらいだから、芸術家仲間を持たず、その方面からの援護は全く期待できなかった。芸術家の世界からは彼女を讃える声は全く上がってこない。1915年には議会に置かれていた彼女の作品は不適切と判断されてフワイなど地方に送られ、あるいは受注した仕事の契約を破棄される。そして1918年には『ネレイダスの噴水』が冒頭のコスタネラ・スルへと追放された。

彼女が彫刻に従事したのは15年ほどだったが、精力的な彼女は彫刻以外にもさまざまな活動に従事している。ローマでは自分の家を設計、ブエノスアイレスでは地下鉄やトンネル、鉄道の鉄橋、歩道橋などを設計し、映写機の試作に挑戦したこともある。また後年サルタに住んだ時はアンデス

鉄道の敷設事業に出資したりしたが、晩年に燃料用の石油発掘に出資して失敗、全財産を使い果たし、姪たちの世話を受けながら、69才で極貧のうちに没した。

私生活では1909年43才の時、17才年下の男性と結婚し世間をあっと言わせる。結婚は8年後、夫の女性関係がもとで破たんしたが、死の直前、夫は彼女に許しを乞い二人は和解した。死後、残された書簡はすべて姪たちの手で焼却され、彼女がロカ大統領の愛人だったことや、バイ・セックスを隠すために結婚したことなどを隠すためだと噂された。

ロラは流れ星のごとく一瞬の光に輝き、忘却の彼方に沈んでいった。後に続くものも弟子もいなかったが、女性芸術家たちのために新しい道を切り開いたことは確かだ。

〔ラテンアメリカ参考図書案内〕

『ブラジル文学序説—文学を通して見えてくるこの国のかたちと国民心理』

田所 清克・伊藤 奈希砂 国際語学社 2011年6月 320頁 2,500円＋税

日本でラテンアメリカ文学の訳書はかなり多く刊行されているが、そのほとんどはスペイン語圏のものであり、ブラジル文学の翻訳出版はかなり少ない。しかもブラジル文学全般について概観した解説書となるとほとんど見かける機会はない。本書は二人のブラジル国立フルミネンセ大学留学経験をもち、精力的にブラジル文学を紹介してきた研究者と翻訳者が、ブラジルの文学を、ブラジルの歴史からその起源、欧州の模倣であるバロック主義、ロマン主義との過渡期であるアルカディズム主義、奴隷解放と帝政崩壊の兆しを背景にした自然主義・写実主義、19世紀末の共和制樹立を背景に優れた詩人を出した高踏・象徴主義、カヌードス戦争勃発を背景に20世紀の幕開けとなる前近代主義、二度の世界大戦の合間に各地で多くの小説家、戯曲作家を生んだ近代主義、第二次大戦後から現在に至る新近代主義・ポストモダン以後の現代ブラジル文学の特色から文学と映画・テレビに至るまで、ブラジル史の展開に対応した文学の変容を詳細に解説したブラジル文学小史と、アレンカール、マシャード・デ・アシス、ジョルジェ・アマード、グラシリアーノ・ラーモスという4人の作家を選んで考察している。

巻末に文学史年表、日本での主要翻訳作品案内とポルトガル語・日本語索引を付けてあり、ブラジル文学の概観を歴史的に知りたい読者には便利な解説書である。

〔桜井 敏浩〕